様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７３０４８０

研究課題名（和文）加齢に伴うコミュニケーション障害に対するケア実践のエスノメソドロジー研究

研究課題名（英文）Ethnomethodological study of care work for communication disorder with aging

研究代表者
秋谷　直矩（Akiya, Naonori）

京都大学・物質-細胞統合システム拠点・研究員

研究者番号：１０５８９９９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、加齢に伴うコミュニケーション障害に対する援助実践を分析する。そこでは、相互行為の構造の解明を目的とする。高齢者介護施設でのケアワーク場面をビデオ撮影し、そこで得られた映像データを対象に、エスノメソドロジーの観点から分析を行なった。また、比較として、視覚障害者の歩行訓練場面の調査・分析も並行して行い、高齢者介護のケアワークの固有性についても検討を行なった。
分析では、高齢者の「能力を推し量る」という探索的行為に注目した。結果として、それは「能力の回復または現状維持の可能性」の理解可能性に指向して組み立てられ、その結果に基づいて、援助行為が「フォローアップ」として組織されていた。

研究成果の概要（英文）：This project conducted care work for communication disorder with aging.
Especially, I aimed at investigation of interactional structures in care settings. I videotaped care work in nursing home, and analyzed video data from perspective of ethnomethodology. And, I researched training settings of orientation and mobility for visually impaired person, and compared result of the analysis of OM training settings with result of analysis of care settings.
I focused on care worker's reasoning action that is guessing of elderly person's competence of organizing ordinary activity. As a result, when care worker organize reasoning action, their practices are oriented intelligibility of recovering or keeping elderly person's organizing ordinary action, based on this, their care work organized as help for elderly person.

研究分野：社会学

キーワード：エスノメソドロジー　会話分析　高齢者介護　ケア

１．研究開始当初の背景

本研究が企図された背景には、日本が国際社会に先駆けて高齢社会に突入したということがある。そのもとでの検討すべき問題は多岐に渡るが、そのひとつに、ケアワークを今後どのように行なっていくかという問題がある。今後、要介護の高齢者が増加していく一方で、ケアワーカーをめぐる社会的待遇の保証や専門性の担保などの問題群がその下位カテゴリーにあるが、本研究では、特に「専門性の担保」に焦点化した。ケアワーカーの専門性に関する議論は、知識や技法の体系化という点において、いまだ十分に定まっておらず、議論が続いている。

なお、ケアワーカーの専門性については、たとえば、その担い手の多くが女性であった点などから、家庭内労働と同一視するような展開もあり、職業としての専門性確立としても重要課題である。

２．研究の目的

本研究は、上述の「背景」にあるように、ケアワーカーの専門性を検討するためのリソースを提供することを第一義とし、実際に現場でいかなるケアワークが組織されているのかを、その技法の解明を通して明らかにしていく。

具体的には、加齢に伴うコミュニケーション障害に対する援助実践を対象に、そこでの実践知の記述的研究を進め、加齢に伴うコミュニケーション障害をめぐる相互行為の構造を解明することである。

３．研究の方法

本研究は、エスノメソドロジーの観点から、加齢に伴うコミュニケーション障害に対する援助実践を分析する。そのために、実際にケアワークが行われているフィールド（高齢者介護施設等）に出向き、ビデオカメラを用いて、ケア場面を撮影する。また、必要に応じて、フィールド固有の慣習や知識を獲得するために、参与観察及びインタビューを実施する。

そして、得られた映像データについて、エスノメソドロジー・会話分析の立場から分析を行う。エスノメソドロジー・会話分析は、「人びとがもちいる方法・方法論」を、人びとが実際にやっていることに即した記述から明らかにしようとするものであり、本研究の目的に照らし、適した手法である。

なお、エスノメソドロジーによる医療・看護・福祉領域における研究は蓄積されてきているが、高齢者介護については、社会的問題としての重要さ、喫緊さでいえば非常に深刻である一方で、エスノメソドロジカルな研究が十分に蓄積されているとは言い難い。

４．研究成果

本研究は、論文２本、書籍一冊、学会発表6 回というかたちで成果発表することができた。また、研究期間中、継続的にフィールド調査を受け入れていただき、今後につながる信頼関係の構築と、分析的知見の積み重ねができた。

本研究の成果を下記３点に集約する。

(1) フォローアップに指向した相互行為の組み立て

高齢者介護において、加齢に伴うコミュニケーション障害は、「過去にはあったものが、加齢により、現在はできなくなっている」という因果関係のもとで理解されていた。ただし、ここで原因とされる「加齢」の内実は複雑である。それは、「能力の回復または現状維持の可能性」への指向がしばしば見られるという点にある。

たとえば、筋力の低下に伴う立ち上がり動作の困難さについては、筋力トレーニングや、「立つ」という動作をよりスムーズに行うための工夫の示唆を相互行為のなかに組み込んだうえで、援助実践が行われるということがあった。

認知症の場合は、「なくなってしまったように見えるものを発見する」ということが相互行為のなかに組み込まれることが多く見られた。たとえば、認知症特有の症状として、感情の起伏が激しくなる感情失禁がある。ただし、衰弱が進行していくにつれて、感情表現の起伏も少なくなっていく。こうした状況において、ケアワーカーは、逆に、感情の発露として認められるような振る舞いを高齢者のやり取りから探し、それが頻繁に生じる方向で相互行為を組み立てていた。一例としては、「笑顔が出る」である。衰弱し、感情表現が出なくなっていった認知症患者がある拍子に「笑った」とき、ケアワーカーは、「笑った」原因を分析し、職場の同僚間で共有するということを行なっていた。結果的に、相互行為の中で発見された「笑顔を出す技法」が共有・実践されていった。

以上の事例は、いずれも、加齢に伴うコミュニケーション障害によって「できなくなっていること」へのフォローアップをするという振る舞いのなかに組み込まれたものである。フォローアップするという行為は、その組み立てのなかに、相手の能力を推し量るという探索的振る舞いが挿入されている。ただし、ここでの探索的振る舞いが、「過去にはあったものが、加齢により、現在はできなくなっている」というロジックのもとで組織されているという点は重要である。つまり、単純に「できなくなってしまった」のではなく、「今はできなくなってしまったが、まだ何かが残っている／回復する余地がある」という指向性のもとでケアワークが組織されているということだ。逆に、これらの点に指向しているがゆえに、「できなくなっていくこと」もまた鋭敏に発見されていくことになる。

以上の観点から見ると、ケアワーカーの専門性とは、身体的技法にとどまるのではなく、

「能力の回復または現状維持の可能性」の探索に指向しつつそれを行うことで、高齢者の「変化」を発見していくように相互行為を組み立てていく点にあると言えるだろう。さらに、そこで発見された「変化」に対する技法の明確化と共有という、チーム介護の実践もまた、専門性のひとつと言える。

(2)視覚障害者の歩行訓練との比較による専門性の対照化

以上の知見が「加齢に伴うコミュニケーション障害」をめぐるケアワーク固有の特徴であるかどうかを検討するために、視覚障害者の歩行訓練場面を並行して調査・分析した。

視覚障害者の歩行訓練は、「自律」に指向したものである。つまり、視覚障害者自身が、単独で歩行できるようにすることが目的となっているため、そこでは、歩行そのものへのフォローではなく、「なにをすれば／知れば単独歩行が可能になるのか」という点に焦点化して訓練が進められる。

この場合、「能力の回復または現状維持の可能性」には指向していないことには注意が必要である。対象者の「できる／できない」ということを見極めるということ、つまり「能力を推し量る」ということが相互行為の中に組み込まれるという点においては、高齢者介護も歩行訓練も、まったく異なる実践でありながら、共通している。しかし、「能力を推し量る」という行為が、次に何を行うためのプレとしてあるのかという点において異なるゆえに、「能力を推し量る」という行為の後の展開はそれぞれ異なったものになる。

つまり、「自律の達成」に指向している歩行訓練の場合は、「能力を推し量る」という行為のあとには、歩行訓練中の視覚障害者が次になにをなすべきかという、適切な行為の選択可能性を示唆するというかたちで相互行為は組み立てられる。一方、高齢者介護の場合は、「能力の回復または現状維持の可能性」に指向している高齢者介護の文脈では、「能力を推し量る」という行為のあとには、それをフォローアップするというかたちで相互行為が組織されていくのである。

以上のように、「能力を推し量る」という行為がそれぞれの実践に組み込まれている歩行訓練と高齢者介護を比較して見ていった場合、上述のような差異が見られた。したがって、先に見ていった高齢者介護施設における実践上の特徴は、「高齢者介護ゆえ」のものであると考えうる可能性が高まった。そうであるなら、そこでの実践上の特徴的な手続きとして先に記述したものは、それ自体がケアワーカーの専門性のひとつとしてとらえうる。

(3)専門性をとらえるための技法

本研究実施の副次的な効果として、ビデオカメラを用いた相互行為場面の撮影をデータとして用いることが、ケアワーカーの専門性を検討する際のリソースとして有用性を持つことが認められた。そこで、本研究の遂行により蓄積された調査技法についても多くの知見を得ることができた。

その成果については、ビデオカメラを用いた社会調査に特化した教科書として、『フィールドワークと映像実践』ハーベスト社（南出和余と共著）を出すことができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①秋谷直矩、佐藤貴宣・吉村雅樹、社会的行為としての歩行：歩行訓練における環境構造化実践のエスノメソドロジー研究、認知科学、査読有、21 巻、2014、207-225

②秋谷直矩、会話分析研究とその応用的利用：社会学者の立場から、コミュニケーション障害学、査読無、32 巻、2015、78-83

〔学会発表〕（計 6 件）

①秋谷直矩、会議場面における資料の参照と経験の語り：ドキュメントの使用に関する応用会話分析、日本社会学会、2012

②秋谷直矩、佐藤貴宣・吉村雅樹、身体運動と知覚のエスノメソドロジー：視覚障害者歩行訓練場面の分析、関西社会学会、2013

③秋谷直矩、「始まりと出会いのコミュニケーション」を対象にしたエスノメソドロジー・会話分析研究の射程、電子情報通信学会 HCG 第 3 種研究会ヴァーバル・ノンバーバル研究会、2013

④吉村雅樹、佐藤貴宣、秋谷直矩、社会的行為としての歩行：視覚障害者による歩行訓練士の空間把握の利用、視覚障害リハビリテーション研究発表大会、2014

⑤秋谷直矩、出来事の記述・解釈・方針の策定：認知症高齢者グループホームのワークの研究、日本保健医療社会学会、2014

⑥秋谷直矩、会話分析の難聴への応用、日本コミュニケーション障害学会学術講演会シンポジウム（招待講演）、2014

〔図書〕（計 1 件）

①南出和余、秋谷直矩、ハーベスト社、フィールドワークと映像実践：研究のためのビデオ撮影入門、2013、119

〔その他〕

アウトリーチ活動

①秋谷直矩、EMCA 初心者セミナー：ビデオカ

メラを用いたフィールドワーク：レクチャーシリーズ(1)~機材の準備~、エスノメソドロジー・会話分析研究会、2012

②秋谷直矩、EMCA 初心者セミナー：ビデオを用いたフィールドワーク、エスノメソドロジー・会話分析研究会、2013

③秋谷直矩、EMCA 初心者セミナー：ビデオを用いたフィールドワーク、エスノメソドロジー・会話分析研究会、2013

④秋谷直矩、質的研究アプローチ【アドバンス編】－ユーザーエクスペリエンスとエスノメソドロジー・会話分析、ヒューマンインタフェース学会第 23 回セミナー、2013

⑤秋谷直矩、EMCA 初心者セミナー：ビデオデータの撮り方、エスノメソドロジー・会話分析研究会、2014

６．研究組織
(1)研究代表者
秋谷　直矩（AKIYA, Naonori）

研究者番号：10589998

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし